

範型と態勢

— ボナヴェントゥラの創造論と万有在神論の比較検討 —

平 野 和歌子

はじめに

ボナヴェントゥラ（c.1221-1274）の思想には、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド（1861-1947）のプロセス哲学から展開された、プロセス神学の特徴があると指摘されてきた。例えば Ewert H. Cousins は、ボナヴェントゥラ研究では今なお影響力ある一人であろうが、彼はその指摘を繰り返している。Cousins によれば、神と世界との関係、すなわち創造主と被造物との関係に関するボナヴェントゥラの思想は、プロセス的な思想と親和性が高いと言う。特に Cousins は論文「ボナヴェントゥラとプロセス思想 (Bonaventure and Process Thought)」の中で⁽¹⁾、ホワイトヘッドの弟子チャールズ・ハートショーン（1897-2000）の「万有在神論 (panentheism)」との近似性を主張する⁽²⁾。ハートショーンは、ホワイトヘッドの神と世界の関係についての理論を「万有在神論」として捉えなおしている。一般的に「万有在神論」とは、神を世界の外に位置づけて両者の間の隔たりを強調するような「有神論」とも、神と世界を同一なるものとする「汎神論」とも区別される。「万有在神論」では、神は世界に内在し、世界全体は神によって包括されるとしても、他方で神は世界から超越した位置づけを保持しているとされる。「万有在神論」の代表的な支持者とされるハートショーンは、神と世界との関係を、精神と肉体の关系到類似するものとして二極間の関係で捉え、神が世界との相互関係の中で何らかの影響を受けると考える。この点は、伝統的な有神論が、神の絶対的な完全性を強調し、神を一極として独立させる方向とは異なっている。Cousins は、ボナヴェントゥラもまた、同時代のトマス・

アクィナスと比べれば⁽³⁾、神と世界との二極間の関係に対する意識がより強く、ハートショーンらの「万有在神論」に近いと言う。ただし Cousins は次の点を付言することも忘れない。ホワイトヘッドやハートショーンらの場合には、神が世界との関係の中で、影響を受け変化すると考えるのに対して、ボナヴェントゥラの場合には神の超越性が彼らよりも堅実に保持されている。このような指摘を行った Cousins の慧眼は、注目に値するだろう。しかし残念ながら、Cousins の論文はその指摘に留まっており、ボナヴェントゥラのテキストを詳細に分析し、その特徴を取り出すところまでには至っていない。Cousins 自身も「それはこの論文の検討の範囲を超える」と断っている⁽⁴⁾。それゆえボナヴェントゥラのテキストの分析を行い、彼の思想がいかなる点でハートショーンらの「万有在神論」と近似するのかを、より精密に明らかにする必要がある。

ボナヴェントゥラの思想において神と世界との関係が詳説されるのは、創造論の文脈であろう。そしてその創造論は、中世の思想家らが基本的にその方向をとったように、三位一体の思想と関連する。創造論と三位一体論との関連性は何より「ヨハネによる福音書」の冒頭の解釈、すなわち「初めに言があった。…万物は言によって成った」(1:1)、「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」(1:14)の解釈に依拠している。「御言」は、三位一体のペルソナのうちに「御子」に固有の特性として帰属され、「御子」において、創造主たる神が抱く被造物の観念、すなわち「範型 (exemplar)」があると解釈される。この大枠の聖書解釈は、当時の思想家らに共有されていたが、しかし「御言」がいかなる役割を神の創造作用において果たすのかに関しては、各思想家の三位一体論に左右される。

ボナヴェントゥラの三位一体論は、新プラトン主義的な理論を基軸として構築されている点で、アウグスティヌスやトマス・アクィナスらの論とは基本的な方向性を違える⁽⁵⁾。新プラトン主義では、万物の生成と完成は、「一者」を起源としてそこからの流出、そしてまた「一者」への還帰という動的な構造で捉えられる。その影響のもとボナヴェントゥラは、御父と御子の間

の出生〔誕生〕をめぐる関係を、第一の「起源 (origo)」ないし「始源 (principium)」である御父からの発出を契機に考える。御父からの発出によってその「終極 (terminum)」が存在することになり、ここに「生む－生まれる」という関係が成り立つ。そしてこの関係に即して、「始源〔起源〕」と「終極」にはそれぞれ「父性」と「子性」が帰属され、父と子のペルソナが成立するのである⁽⁶⁾。このように三位一体論でも、父と子の関係は、二極間の動的な関係として理解されている。それゆえ創造論において、御子が被造物の「範型」として、父なる神と被造物との「中間 (medium)」に位置づけられる際にも⁽⁷⁾、三位一体の動的な関係を前提としてその特徴を反映させているはずである。それは、ボナヴェントゥラがアウグスティヌスらのように「範型」をいわば静的な型としてではなく、動きや運動を内属させる型、すなわち「態勢的な範型 (dispositive exemplar)」として捉えるところに認められるのではないか⁽⁸⁾。Cousins はボナヴェントゥラの「態勢的な範型」に言及していないが、しかしながらこの点に着目すれば、御子が「態勢的な範型」としていかなる仕方でも世界に関係するのか、もしくは被造物に内在するならば、それはいかなる仕方なのかを、より明確にできるはずである。そこで本稿ではこの点に焦点を当て、ボナヴェントゥラが三位一体論を前提としつつ、さらに創造論において「御言」ないし「範型」としての御子をいかに理解するのかを検討し、ボナヴェントゥラ思想と「万有在神論」について類似と相違を明らかにする。

ただその際に、ボナヴェントゥラの三位一体論が、次の危険性を本質的に孕んでいることには、常に注意を払わねばならない。それは、御子が父なる神からある程度の距離を取り、被造物の側へと引き下げられるという危険性である。事実ボナヴェントゥラは、新プラトン主義的な流出論に従って、御父のペルソナを第一義的に「起源〔始源〕」としてみなすため、御子に従属的な位置づけしか与えられないかのような発言をすることがある。勿論ボナヴェントゥラがアリウス主義に陥るはずはなく、三位一体の内部では、聖霊の発出を考慮すればこのような恐れはない、と論者は考えている⁽⁹⁾。他方で

三位一体の外部へと議論が展開して創造論に及んだ際、「範型」としての御子は、どのように被造世界から超越しているとされるのか。この問題は、Cousins がボナヴェントゥラとハートショーンらの相違として指摘した点にも関連する、と考えられる。上述の通り Cousins によれば、ボナヴェントゥラの場合には汎神論に分類されないだけでなく、「万有在神論」の特徴を備えながらも神の超越性が堅持され、神の側に一切の変化はないとされる。それでは、具体的に神の超越性や永遠不変性がいかなる点に認められるのかについても、解明されなければならない。

上述の論点を検討するために、本論では次のように考察を進める。まず第1章で、神が被造世界に内在するとされることについて、ボナヴェントゥラが『命題集註解』の中で論考しているため、それを検討する。その解答でボナヴェントゥラは、神が世界に内在することを肯定している。だがこれだけでは、汎神論としてみなされる恐れがある。しかしボナヴェントゥラは、神と被造物が完全に一致するような仕方でも全面的に内在することまで、肯定するわけではないはずである。そのため第1章では、ボナヴェントゥラがどのような論拠に基づいて肯定するのかに着目しつつ検討する。次に第2章では、神が被造物に対してどのように関係するのか、特に神と被造物の「中間」にある御子〔御言〕がいかに働くかについて検討する。その際に主に御子〔御言〕の「態勢的な範型」としての働きを考察することになる。これらの考察の結果、神と被造物との距離、さらに言えば神の超越的で永遠不変的な位置づけについても明確にすることを目指す。

1. 神と被造物の内在関係

ボナヴェントゥラは『命題集註解』（第1巻第37区分第1部第1項第1問題）で「神はすべてにものの内にあるか（*Utrum Deus sit in omnibus rebus*）」との問いに対して、「神が万物の内に存在することの必要性（*necessitas*）」は、一方で「神自身の完全性（*perfectio ipsius*）」の側から、他方で「諸事物の欠

乏 (*indigentia rerum*)」の側から捉えられる」と述べ⁽¹⁰⁾、二点を理由に肯定的な立場を示している。一見すれば、肯定的な解答は汎神論の誹りを受けかねないが、その内実をつぶさに精査するならば、御子を含めた神の超越性は担保されるはずである。そのためこれを検討することは、ボナヴェントゥラの創造論と、ハートショーンらの「万有在神論」との距離を明確にすることにもつながると予測される。そこでこの解答を検討し、いかなる論拠で「神はすべてのものの内にある」ことが肯定され、またどの点が当該の問題箇所では考察の範囲外になっているのかを明らかにする。

まず一つ目の理由である「神自身の完全性」に関してボナヴェントゥラは、神が最高度に「単純性 (*simplicitas*)」を有することと、最高度の「無辺際性 [無限性] (*immensitas*)」と最高度の「能力 (*potestas*)」を有することとを関連づけて論考している。要するに、最高存在かつ一なる神が、複数の被造物に内在するあり方は、一方で神はその「単純性」を確保しながら、他方で複数の被造物に対して「無辺際」にあり、かつ「能力」を及ぼす仕方であると考えられている。ボナヴェントゥラはこの文脈で、神の単純性を「何ものに対しても制限されないこと」であると捉え、それゆえに神は全被造物の内に無辺際の仕方 で存在すると言う。

また神の能力に関して、ボナヴェントゥラは「[神は] 最高に単純であるから、無限に最も力ある者であり、それゆえ彼 [神] の力はすべてのものの内にある (*virtus eius in omnibus*)」と述べ⁽¹¹⁾、神が被造物に内在するのは「力」によってだと考えている。ここでボナヴェントゥラは「能力 (*potestas*)」という単語を、「力 (*virtus*)」に言い換えている。『命題集註解』の他の箇所では「*virtus*」の表現は、神的ペルソナの区別を意識すべき文脈で登場することが多く、とりわけボナヴェントゥラは御子の「力」に注目する場面で用いているように見受けられる⁽¹²⁾。ボナヴェントゥラは、一なる神自身や父なる神の力を「*potestas*」と表現するのに対して、御子の「*virtus*」と言い、「生む者－生まれる者」の関係上の区別に即して使い分けている。上述の通り、ボナヴェントゥラの三位一体論は新プラトン主義的な流出論に依拠する

がゆえに、力に関しても御父と御子との間にいわば従属関係を認めるような発言をする。この点については本稿では詳説しないが⁽¹³⁾、概要を言えば、王が執行吏を通して権力を行使するのと同様に、「御父が御子を通して働く (Pater operatur per Filium)」とされる⁽¹⁴⁾。つまり、力を行使する主体は御父であり、御子には御父に起因する力、すなわち「従属的権能 (subauctoritas)」しかない。御子の力は、御父からの出生を通して獲得された「生むことの受動的な能力 (potentia gigendi passiva)」であり、御子の内に「形相的 (formaliter)」、すなわち質料の内に形相があるように内属するとされる⁽¹⁵⁾。このように三位一体の父と子の関係においては、御子の受動性が強調されるが、本論の次章で詳細を見るように、創造論の場面ではむしろ御子は被造物に対して能動的に働きかけると考えられ、その働き方が問題になってくる。そこでボナヴェントゥラが『命題集註解』(第1巻第37区分第1部第1項第1問題)で、神的力が全被造物の内にあると言うとき、とりわけ御子が父なる神と被造物との「中間」に位置づけられることから⁽¹⁶⁾、御子の「力」の働き方についてさらに論考されなければならないはずである。しかしながら、その論点は当該の問題箇所では論じられておらず、御子の能動的な働きが扱われる箇所を、別途検討する必要がある。

また、ボナヴェントゥラが神は万物に内在すると言うときの被造物の側からの論拠、「諸事物の欠乏」に関しては、被造物には「可能性 (possibilitas)」と「空虚さ (vanitas)」しかないため、神の内在が必要だとされる。被造物の「存在 (esse)」は、無から創造されたため、神からの働きかけなくしてそれ自体では「可能性」にすぎず、被造物には「空虚さ」しかない。加えてボナヴェントゥラは被造物の存在が「可能性」にすぎないがゆえに、その「安定性 (stabilitas)」のためにも神からの絶えざる働きかけが必要であると考え、次のように主張する。

それ〔「可能性」の〕ゆえに、それ〔被造物〕は流動可能性 (fluxibilitas) と可変性 (variabilitas) を有しているから、「安定性」を欠いており、そ

れ〔被造物〕に「存在」を与える者の「現存 (praesentia)」なくしては存在しえない。この事例は、水中での印章の形跡について明らかにされる。その〔形跡〕は、印章の現存がなければ、一瞬も保持されない⁽¹⁷⁾。

ここによれば、神の被造物に対する働きかけは、無からの創造の時、すなわち被造物が非存在から存在へ変化する時だけでなく、一旦創造された後も被造物が安定して存在し続けるところにもあることになる。ボナヴェントゥラは類似の事例として水中の印章を挙げており、印章の現存によって形跡が保たれるのと同様に、神が被造物に現存しなければ、被造物の存在が保持されないと考えている。この具体例が持ち出されたところからして、被造物が継続的に存在するには、神からの不断の働きかけがかなり強い程度に必要なものとされていることがわかる。このような点に、ボナヴェントゥラは思想がホワイトヘッドやハートショーンらのプロセス的な思想と似ているとされる根拠もあるのだろう。Cousins の見解によれば、トマス・アクィナスら古典的な思想家の大半は、神が世界創造の時間的なプロセスから超越していることを強調するが、ボナヴェントゥラは神の超越性を確保しながらも、神が創造のプロセスに関与することにも関心を払っている⁽¹⁸⁾。ボナヴェントゥラの創造論とプロセス神学との詳細な比較に関しては別の機会に譲りたいが、少なくとも上の『命題集註解』の引用箇所から、被造物の安定性や継続的な存在、すなわち被造物のいわゆる存在プロセスには、神からの不断の働きかけが必要であると言える。ただしそのうえで、ホワイトヘッドらの見解のように、神自身さえも被造物への働きかけを通して変化するののかという点についてはさらなる検討が必要であり、それは次章で行うことにする。

ここまでの考察から、ボナヴェントゥラが次のような観点に着目しながら、神が全被造物に内在することを肯定していることがわかる。神はその単純性といった神的属性を保持しながらも、被造世界に無辺際に、そして神的力という仕方で内在する。また、神のその働きかけは不断に被造物の内に現存するものであり、それがなければ被造物の存在は安定して保持されない。ボナ

ヴェントゥラの簡明な説明によれば、「神は、被造物の内に本質と現存と能力によって（*per essentiam, praesentiam et potentiam*）あるので、…むしろ被造物は神に対して、保持かつ維持する原因に対する（*a causa conservante et sustentante*）ように依存する」⁽¹⁹⁾。要するにボナヴェントゥラによれば、被造物自体の保持と維持には、神自身とその力が被造物に現存していなければならないのである。

ただ留意すべきは、神の無辺際性や力、そして不断の現存という観点だけを見れば、ボナヴェントゥラがやはり汎神論を支持していると受け取られかねないことだろう。その可能性を排除するには、神がその「力」をいかなる仕方では被造物に内在させるのかに関して、さらなる考察が必要である。そこで次章では、御子が被造物の範型としていかなる力を能動的に発揮するのか、見通しを含めて言えば、いかなる仕方では被造物を「態勢づける」のかを検討する。加えて、その態勢づけが不断に被造物の内で現存し、それにより被造物の安定性や継続的な存在が可能であるならば、それはいかなる仕方であり、どのようにして神の超越性や永遠不変性が確保されるのかについても明らかにする。

2. 被造物の範型と神の超越性

2-1. 「態勢的な範型」としての御言

ボナヴェントゥラは、「力」に関して「御父が御子を通して働く」と言うように、「御言」が父なる神と被造物との「中間」とであると言う際にも「御父が御言を介して（*per Verbum*）働く」との構図を堅持している⁽²⁰⁾。つまり御言の特性は、発話主体である御父と、そこから発せられる御言との間のペルソナ的な区別を前提にする。例えばトマスの場合も「御言の名称は、神において本来の意味で理解されるならば、決して本質的な名称ではなく、ペルソナ的な名称である」として⁽²¹⁾、御子のペルソナの特性を問うという基本的には同じ方向性をとる。さらにボナヴェントゥラによれば、御言は発話主

体の御父に対して三つの「類似性」を持つ。すなわち (1)「御父を模倣する類似性 (similitudo Patris imitativa)」、そして (2)「諸事物の範型的類似性 (similitudo rerum exemplificativa)」、(3)「働きの類似性 (similitudo operativa)」である。これらの類似性の各特性は、次のように説明される。

明らかに神の御言は、ご自身を語る御父への関係自体 (respectus ad Patrem) ——それ〔御父〕から生まれ、あらゆる点で〔御父に〕類似する——である。また〔御言は〕被造物との関係であり、「態勢的な範型 (dispositiva exemplaritas)」や「働きの力 (operativa virtus)」という仕方に関係する。そしてこれらは「現実態における関係 (respectus in actu)」ではなく、「能力態における関係 (respectus in habitu)」のみを意味するので、「範型」は能力態における関係であり、同様に「力」もそう〔能力態における関係〕である、と私は言う。なぜなら、神は行わない〔現実化しない〕多くのことを知っておりそれをなしうから。この意味で〔神は〕「永遠の御言 (Verbum aeterna)」である。それゆえ賜物〔聖霊〕についてすでに述べたように⁽²²⁾、それは今や御言〔御子〕についても理解されるべきである⁽²³⁾。

ここから三つの類似性は、大きく二つに分類できる。(1)「御父を模倣する類似性」は、三位一体内部での子の父に対する関係であり、これが永遠なる御言である。残りの二つ (2)「諸事物の範型的類似性」、(3)「働きの類似性」は、御言ないし御子の被造物に対する関係である。第一の三位一体内部の父と子との関係に依拠して、残りの二つの創造における御言と被造物との関係は考えられている。端的に言えば、ここでも三位一体論と創造論とが関連づけられており、御父からの御子〔御言〕の出生をめぐる内的三位一体の関係と、御言と被造物の間の創造の関係とが、並行的に考えられている。そして後者の (2) と (3) の関係において、御子〔御言〕は被造物に対して「態勢的な範型」や「働きの力」として関わり、これらは現実態ではなく「能力態にお

ける関係」だとされる。ボナヴェントゥラは「能力態における関係」を言い換え、「現実的に「結果（effectus）」を含意しない」関係であり⁽²⁴⁾、あくまでも御子〔御言〕は被造物を態勢づけるだけであると言う。それに対して三位一体の内的関係における「結果」とは、固有には聖霊〔賜物〕についてのみ言われるが⁽²⁵⁾、上の引用箇所のように被造物との関係に関する文脈では、御子〔御言〕もまた現実的な結果を有するとされている。したがって、御子〔御言〕を含む神には（1）の類似性があり、「能力態における関係」の（2）と（3）ではない点で、被造物よりも超越していると言える。

それでは御子〔御言〕は、父なる神と被造物との間の「中間」という微妙な位置にあるが、御子〔御言〕は被造物にとって「態勢的な範型」でありながら、厳密にはどのような意味で被造物を超越しているのか。ボナヴェントゥラは三位一体の御父と御子の内的関係と、創造における御子と被造物の関係を並行的に、類似する様態として論考するという方針を維持しながら、「範型」と「態勢づけ」に関しても詳説している。ボナヴェントゥラは「範型」に関して、被造物が「範型づけられる」という受動的な側面と、御子が「範型づける」という能動的な側面を区別し、次のように述べる。

一方では、固有の意味で「範型づけられたもの（*exemplatum*）」がある。被造物は、「範型」によって「範型づけられたもの」（*exemplatum ab exemplari*）として、神から生み出される。このようにして「範型」は「範型づけられたもの」に関して「形相的な原因性（*causalitas formalis*）」を持つ。他方では、「範型づけの特性〔観念〕（*ratio exemplandi*）」のように、範型づけの様態で発出することが意味される。このようにして、御父の御言と言われる御子自身が発出すると思われる。これ〔御言〕によって、〔御父は〕自身を語るだけでなく、その他すべてのものを態勢づけることもしている⁽²⁶⁾。

ここから、御子も含めた神全体と被造物の関係という側面から見れば、ここ

に「能動的に範型づけるもの〔範型〕－受動的に範型づけられるもの」の関係がある。このとき「範型」は、いわゆる形相と質料の関係におけるように、被造物の形相づけを行う原因である。他方で、御子が能動的に範型づけるという特性を獲得した側面について言えば、御子がこの特性を有するのは、御子が御父から出生〔発出〕する様態そのものを、御子自身において反映させているからである。換言すれば、「生む者－生まれた者」の関係に即して、御子は範型づけの力を受け取っている。そしてその範型づけの力には、すべてを態勢づける働きも含まれており、御子自身もまたその態勢づけの力を内在させている。

したがってボナヴェントゥラは「態勢づけ」を二つのレベルで語っている。第一には、御父が根源的主体として被造物を態勢づけるレベルがあり、このとき御子はその態勢づけを御父からの出生〔発出〕を通して得ている。これが「永遠的な態勢づけ (*dispositio aeterna*)」と特定され、「これに即して、〔御子は〕世界の範型や生きるもののすべての完全な技術だと言われる」⁽²⁷⁾。そして第二には、御言が先に見た(2)の「態勢的な範型」として被造物に対して関わり、御子自身が被造物を能動的に態勢づけるというレベルがある。この範型自体には、父と子の間の「生む者－生まれた者」の動的関係を通して、態勢づけという方向性を持った力が備わっている。一般的にボナヴェントゥラ思想は、範型主義に分類されるが、範型に動的特性を認める点で、単にプラトン主義的ではなく、新プラトン主義的な特徴を色濃く反映している。また念のため付言すれば、第一のレベルでは御父の主体性が強調され、御子は受動的にその態勢づけを受け取るだけだとされるが、第二レベルでは御子自身にも主体性や能動性があるとされている。本論第1章で概説した通り、三位一体の内的関係では、新プラトン主義的な流出論に基づいて「御父が御子を通して働く」とされ、御子には「従属的権能」や「受動的能力」しかないと考えられていた。しかしながら創造論では、御子は被造物に対して形相的かつ能動的な原因として働くと考えられ、御父と御子との間の従属関係が解消される方向で捉え直されている。

本節の考察から、ボナヴェントゥラが汎神論やアリウス主義を支持しているとの批判は、退けられるはずである。なぜなら、確かにボナヴェントゥラは第1章で見たように神が全被造物に内在することを肯定しているが、神と被造物を「能動的に範型づけるもの〔範型〕」と「受動的に範型づけられるもの」として区別し、これらの間には「能力態における関係」しかなく、被造物の側には現実的な「結果」としてのあり方を認めていないからである。これらの点から、ボナヴェントゥラは汎神論者ではないと考えられる。またアリウス主義のように、御子を被造物の位置にまで引き降ろすわけではなく、御子には御父と同様に能動的で「永遠的な態勢づけ」の力が認められている。それゆえボナヴェントゥラは、神は全被造物に内在することを肯定しながら、同時に神の超越性を確保しており、その限りで万有在神論と基本的な方向性を大きく違えるわけではないだろう。

ではそのうえで、ボナヴェントゥラは実際に、神自身までもが被造世界との相互関係を通して変化しないと主張しているのかを、確認しなければならない。この点がホワイトヘッドらとの相違点として、*Cousins* により指摘されていた。第1章で見たように、神が被造物に現存しなければ、被造物の安定性や継続的な存在が保持されないのだが、その一方でその過程において神はどのようにして永遠不変のままなのか。この点について、ボナヴェントゥラの予定（*praedestinatio*）論を考査することで、一見解を得ることができるだろう。事実、ボナヴェントゥラは予定論の中で「態勢づけ」を「神的配剤」や「秩序づけ」として捉え、神の予定の必然性や永遠不変性と、被造物の偶然性や時間性とを対比している。そこで次節では、主にボナヴェントゥラの予定論を取り上げ、神の永遠不変性がどのように保持されるのかを検討する。

2-2. 態勢づけと時間——神の永遠不変性と被造物の可変性——

前節でみた通り、神である御言〔御子〕において被造物の範型があるが、その範型は態勢づける力を被造物に及ぼすだけであり、被造物の側には現実

的な「結果」はなく「能力態における関係」しかない。このことに永遠性の観点を関連づけ、ボナヴェントゥラはアウグスティヌスを参照しつつ次のように言う。

アウグスティヌスは「あなたが語ることは何でも、永遠の御言によって語り、あなたが語ることは何であれ生じる」と述べている。ただしこの「語る」は永遠であり、「態勢づける」限りで力を持つ、と言われうる。またこれは「結果」ではなく、「能力態における関係」を意味する。…そしてこれがアウグスティヌスの理解であることは、次の文章から明らかである。「あなたは同時かつ永遠に語る。しかし、あなたがなすことは同時かつ永遠には起こらない」⁽²⁸⁾。

ここによれば、永遠なる御言において、被造世界で起こる事柄が確実に定められているが、被造物の側から見れば、時間の流れの中でのみその定めは実現されていく。また神自身内部での永遠的な予定には、事柄の生起について確実性がある一方で、神と被造物の間には「能力態における関係」しかなく、神は被造物を態勢づけるだけである。ボナヴェントゥラは『命題集註解』（第1巻第40区分第2項第2問題）で「神の予定は結果〔出来事〕(eventum)に確実性(certitudo)を措定するか」との問いに関して、被造世界の「生起する事柄(res eveniens)」と「予め秩序づける神(Deus praecordinans)」を区別しながら解答している。前者の「生起する事柄」について、ボナヴェントゥラはとりわけ被造物の自由意志を根拠として挙げ⁽²⁹⁾、確実性に對置される「偶然性(contingentia)」しかないと言う。それに対して後者の神の側については、彼は救済の予定に関する選びに言及しながら、次のように説明する。

他方で「予め秩序づける神」の側から「確実性」について私が語るなら、救いの結果は、「不可謬性(infallibilitas)」の確かさによって確実である。なぜなら神的予知(divina praescientia)は誤らず、予知されたように常

に生じるからである。またそれは「不変性 (immutabilitas)」の確かさによっても確実である。なぜなら「神的な態勢づけ [配剤] (dispositio)」と「秩序づけ (ordinatio)」は変化されず、[神が] ある時は一方を選び、またある時は他方を選ぶのではなく、むしろ一度選ばれた者は常に過去も未来も [選ばれ]、他の者はそうでないからである⁽³⁰⁾。

ここで神の予定の確実性は、その予知の「不可謬性」と「不変性」の観点から論考されている。ホワイトヘッドらと比較すれば、明らかにボナヴェントゥラは被造世界の「偶然性」に対して、神が「不変性」を持つと断言している。またこの箇所から、「態勢づけ [配剤]」とは「秩序づけ」であると言え、神の視点から見れば、被造世界を態勢づける方向性は、確実に予定されている。それに対して被造世界の視点から見れば、それはあくまでも偶然性を含む、態勢づけであることになる。特に未来の事柄の「態勢づけ」ないし「秩序づけ」に関して、神的予定の確実性と被造的な偶然性との関係について、ボナヴェントゥラは度々言及する。なぜなら、未来は現在と過去とは違って未だ現実化していないとしても、神に予知され「態勢づけ [秩序づけ]」されているならば、そこに偶然性や非必然性の余地はあるのかが問題になるからである。これに関してボナヴェントゥラは予知の意味を二つに分け、「神的認識の現実態の働き (actus) は、これは「ある」あるいは「あった」ことが必然である。しかし、ある働きに向けた未来の秩序づけ (ordinatio futurae ad illum actum) は、必然的ではない」、すなわち偶然的であると述べている⁽³¹⁾。要するに、神内部での永遠なる予知の視点では、「態勢づけ [秩序づけ]」は神的認識において現実的なものであり、確実に決定されている。他方で被造世界の時間的な視点では、その「態勢づけ [秩序づけ]」は偶然的で非必然的な可能性に留まっているのである。

ところで被造物の時間性や可変性は、何に起因するのか。ボナヴェントゥラによれば、それは「質料 (materia)」に因るのであり、「時間 (tempus) は、質料が形相を目指すこと (materia tendit ad formam)」に起因して、そして

それが運動 (motus) によって引き起こされるゆえに、その「時間的な」「存在 (esse)」を持つ」⁽³²⁾。換言すれば、質料が形相へと向かう態勢にあり、形相の獲得を目ざすところに、時間の流れがある。そしてボナヴェントゥラは、「態勢づけ」と被造物に関わる「産出 (productio)」に関して、次のように述べている。このとき「産出」とは、(I) 被造物の本性的な変化や運動、(II) 被造物の存在自体の創造を意味している。

ある産出 (I) では、産出されるものは今とより前では別様の状態にある。なぜなら、それ自身のあるものに即して、より前にはある態勢 (dispositio) にあったが、今は別の「態勢」にあるから。そしてこのような産出は、自然本性的な出生のように、質料的な原理に基づいている。別の産出 (II) では、産出されたものがあらゆる仕方で今の状態にあり、決してより前にはない。この産出は、無からものである。…第一のもの (I) は、「運動」と「変化 (mutatio)」と「産出」の特性を持つ。「運動」は、「付帯的な態勢づけ (dispositio accidentalis)」によって起こる「質料の構え (praeparatio materiae)」に因り、これは継起 (successio) と時間を要する。「変化」は、存在に向かう出現 (exitus) や実体的形相の受容 (receptio substantialis formae) に因り、瞬間的に起こる。「産出」は、その形相をそれ自体からではなく、他の「作出因的なもの (effectivum)」⁽³³⁾ から持つことに因る。…第二のもの (II) は、「運動」の特性を欠くが、「変化」と「産出」の特性は持っている。「運動」の特性を欠くのは、質料がないので、いかなる態勢も先行しえないからである。しかし「変化」の特性があるのは、ここには急で新たな形相の導入があるから。そして「産出」の特性があるのは、これは他の「作出因的な始源 (effectivum principium)」を有するからである⁽³⁴⁾。

上の引用では省略したが、(III) 第三の産出として、三位一体の御子の出生が挙げられる。御子の出生には、質料もなく無からの創造でもないため、産

出される者、すなわち御子は今と前に対して全く同じ状態にある。これは永遠的な「産出」であり、時間的な「運動」と「変化」はない。他方で被造物は、まず(II)無からの創造の際に、「作出因的な始源」によって「非存在」から「存在」へと引き出され、そこに形相が導入される。そして創造後には、(II)質料はある時とその次の時には別々の「付帯的な態勢づけ」にあり、質料が自身以外の作出因から、形相や実体的な形相を受容する。この過程に運動変化がある。つまり、質料は各瞬間にある形相へと向かう「付帯的な態勢づけ」の状態にあって、形相の獲得を目指すところに運動変化や時間の流れが生じることになる。上の引用箇所ではボナヴェントゥラは、質料の「付帯的な態勢づけ」が根源的にはどこに由来するのか、また被造物を無から創造する「作出的な起源」が何かについて明言していないが、それが究極的には神であることは明らかである。前節までの考察によれば、神の御言は「態勢的な範型」であり、質料にとっての形相のように、被造物に対して「形相的な原因」であった。これを勘案すると、被造物は、そのような範型としての御言を究極的な始源として態勢づけられていると考えられる。

以上からボナヴェントゥラによれば、神は確実に予定した方向へと被造世界を態勢づけるが、神と被造物の間の「能力態における関係」においては、その態勢づけは偶然的で非必然的である。被造物は瞬間ごとにその質料が形相の獲得に向けて多様な態勢づけの状態にあり、そこに時間の流れや運動変化がある。それに対して神は、被造物の「安定性」や継続的存在のためにその内に常に現存し、時間の流れの中で被造物を態勢づける究極的な原因ではあるが、しかしながら同時に神自身は永遠不変性を保持している。

おわりに

ボナヴェントゥラには「万有在神論」に類似する特徴があるとの Cousins の指摘を発端に、本論ではそれが具体的にはどのような点に認められるかについて、ボナヴェントゥラの『命題集註解』の分析を通して検討した。確か

にボナヴェントゥラは、神がすべての被造物に内在することを肯定しながら、同時に神の超越性を主張しており、「万有在神論」と基本的には同じ方向性をとっている。被造物の「安定性」や継続的な存在には、水中で印章の現存によってその形跡が保持されるように、神の現存が常に必要であるとも述べている。この点も、Cousins がホワイトヘッドらのプロセス的な思想に近いという主張を、裏づけることにつながるだろう。ただボナヴェントゥラの創造論を詳細に見れば、彼の思想的な特徴も挙げるができる。「態勢的な範型」としての御言は、三位一体自体における御父と御子の動的な関係に即して考えられており、新プラトン主義的な範型主義であると言える。

また Cousins が指摘していた通り、実際にボナヴェントゥラは神が被造物との関係を通して変化するとは考えておらず、この点はホワイトヘッドらとは思想的な立場を違えている。ボナヴェントゥラによれば、神と被造物との関係は、現実的な「結果」を含まない「能力態における関係」でしかなく、被造物は態勢づけられながらも偶然的で非必然的なあり方をする。また被造物の質料が形相を得るために多様な態勢づけの状態にあるところに、時間の流れや運動変化がある。それに対して創造論と併せて予定説を見るならば、神は永遠不変性を保持しながら、その神的認識において被造世界の態勢づけを予定しているとされる。このようにボナヴェントゥラは、神が究極的な原因ないし範型として被造物と関わることを論考するときにも、常に神の超越性や永遠不変性を揺るがないものとして確保している。

注

- (1) Cf. Cousins, Ewert H. (1974), pp.64-65.
- (2) 「万有内在神論」とも呼ばれる。これは、もとは19世紀初めにドイツの哲学者クラウゼが、有神論と汎神論を統合的に発展させた神論である。ギリシア語で「万物は神の内に」を意味する *pan-en-theo* を語源としており、神は世界全体を包みながら超越すると考える点で、「汎神論 (pantheism)」とは異なる。「万有在神論」についての一般的な説明は、A. リチャードソン / J. ボウデン編 (2005)などを参照。

- (3) Cf. Cousins, Ewert H. (1974), p.58.
- (4) Cf. Cousins, Ewert H. (1974), p.65. 被造物の中でも特に人間に焦点を当て、人間と神との関係のあり方について明らかにをしようとするならば、ただ単に御子に関して考察するだけでは不十分である。さらにキリストが、その「中間」として果たす役割が問題になり、むしろ Cousins はキリストの働きの意義の方を強調している。しかし本稿では、キリストについてはひとまず扱わずとも検討できると考えられるため、御子の働きに限定している。
- (5) ボナヴェントゥラの三位一体論が思想上で基本的にどのような特徴を持つとされるのかについては、Hayes, Zachary (2014)、Lydia, Schumacher (2011)、Thom, Paul (2012)などを参照。
- (6) 詳しくは拙論 (2021) の中で検討しているため、こちらを参照いただきたい。
- (7) Cf. *I Sent.*, d.27, p.2, a.unicus, q.1, ad.6.
- (8) Cf. *I Sent.*, d.27, p.2, a.unicus, q.2, concl.
- (9) この点については、拙論 (2023) の中で検討している。本来、創造論における聖霊の役割りも検討しなければならないだろう。しかし本稿では御父と御子との関係のみに焦点を当て、聖霊に関しては稿を改めることにする。
- (10) *I Sent.*, d.37, p.1, a.1, q.1, concl.
- (11) *Ibid.*
- (12) Cf. *I Sent.*, d.32, a.2, q.2, ad.4.
- (13) 詳しくは、拙論 (2023) を参照。御子に「従属的権能」しか認めないというボナヴェントゥラの主張は、御父と御子の一性を揺るがすとして、トマス研究者から批判を受けてきた。しかし論者の見解では、御父と御子の関係のみに限定せず、聖霊の発出を考慮すればそのような批判は妥当ではないと考えられ、拙論 (2023) ではそれを検討している。
- (14) Cf. *I Sent.*, d.19, p.1, a. unicus, q.3: d.32, a.2, q.2.
- (15) Cf. *I Sent.*, d.7, dubium7.
- (16) Cf. *I Sent.*, d.27, p.2, a.unicus, q.1, ad.6.
- (17) *I Sent.*, d.37, p.1, a.1, q.1, concl.

- (18) Cf. Cousins, Ewert H. (1974), p.66.
- (19) III *Sent.*, d.1, a.1, q.1, concl.
- (20) I *Sent.*, d.27, p.2, a.unicus, q.2, concl.
- (21) Cf. Aquinas, Thomas, *ST*, I, q.34, a1. ボナヴェントゥラと同様にトマスやアウグスティヌスも御言についてベルソナの区別を前提に考えるが、ただしボナヴェントゥラの方が父と子の関係により強い区別、いわば従属関係を認める点は留意すべきであろう。
- (22) Cf. I *Sent.*, d.18.
- (23) I *Sent.*, d.27, p.2, a.unicus, q.2, concl.
- (24) *Ibid.*
- (25) Cf. I *Sent.*, d.32, a.1, q.2, concl. ボナヴェントゥラは内的な三位一体論を扱う文脈では、御子ではなく、聖霊を固有の意味で「結果」、より厳密には「形相的な結果 (effectus formalis)」と考えている。この点については拙論 (2023) を参照。
- (26) I *Sent.*, d.6, a.unicus, q.3, concl.
- (27) I *Sent.*, d.27, p.2, a.unicus, q.4, concl.
- (28) I *Sent.*, d.27, p.2, a.unicus, q.2, concl.
- (29) 自由意志の点は本稿の目的を超えるため言及するにとどめるが、勿論、神的予定による決定と被造物の自由意志との関係は重要な論点である。
- (30) I *Sent.*, d.40, a.2, q.2, concl.
- (31) I *Sent.*, d.38, a.2, q.2, concl.
- (32) II *Sent.*, d.2, p.1, a.1, q.2, concl.
- (33) 写本の中には *principium* が追加され、*effectivum principium* と記されているものがある。その点からも、(I) の究極的な原因が神であることは明言されていないが、(II) の「作出因的な起源 (*effectivum principium*)」が神であることは明らかであるため、(I) についても同様に解釈できると考えられる。
- (34) II *Sent.*, d.1, p.1, a.3, q.1, concl.

参考文献

一次文献

- ・ Aquinas, Thomas (1882-), *Opera Omnia*, ed. Leonina, Rome.
- ・ Bonaventura (1882), *Doctoris Seraphici S. Bonaventurae Opera Omnia, vol. I, Commentaria in Quatuor libros Sententiarum Magistri Petri Lombardi*, edita studio et cura PP. Collegii a S. Bonaventura, ad Claras Aquas (Quaracchi).
- ・ — (2014), *Commentaries on the First Book of Sentences: On the One and Triune God*, ed. Quaracchi Fathers, Masfield, Massachusetts.

二次文献

- ・ Bougerol, J. Guy (1963), *Introduction to the Works of Bonaventure*, tr. from the French by José de Vinck, Paterson, N.J. /St. Anthony Guild Press.
- ・ Costa, Damiano (2020), “Was Bonaventure a four-dimensionalist?,” *British Journal for the History of Philosophy*, Volume 28, Issue 2, pp. 393-404.
- ・ Cousins, Ewert H. (1969), “Truth in St. Bonaventure,” *Proceedings of the American Catholic Philosophical Association*, Volume 43, pp.204-210.
- ・ — (1974), “Bonaventure and Process Thought,” *Listening*, Volume 9, Issue 1/2, pp. 54-71.
- ・ — (1978), *Bonaventure and the Coincidence of Opposites*, Chicago/Franciscan Herald Press.
- ・ — (1992), *Christ of the 21st Century*, New York.
- ・ Cross, Richard (1999), “Four-Dimensionalism and Identity Across Time: Henry of Ghent vs. Bonaventure,” *Journal of the History of Philosophy*, Volume 37, Number 3, pp. 393-414.
- ・ Cullen, Christopher M. (2006), *Bonaventure* (Great medieval thinkers), New York/Oxford university press.
- ・ Hartshorne, Charles (1964), *The Divine Relativity: a Social Conception of God*, New Haven/ Yale University Press.
- ・ — (1972), *Whitehead's Philosophy: Selected Essays, 1935-1970*, Lincoln/ University of Nebraska Press. (『ホワイトヘッドの哲学——創造性との出会い』松延慶二・大塚稔訳、行路社、1989.)

- ・ Hayes, Zachary (2014), "Bonaventure's Trinitarian Theology," *A Companion to Bonaventure* (Brill's Companions to the Christian Tradition), ed. Jay M. Hammond, J.A. Wayne Hellmann and Jared Goff, Leiden, pp.189-245.
- ・ Lydia, Schumacher (2011), *Divine Illumination: The History and Future of Augustine's Theory of Knowledge* (Challenges in Contemporary Theology), Oxford/Wiley-Blackwell.
- ・ Thom, Paul (2012), *The logic of the Trinity: Augustine to Ockham*, New York/ Fordham University Press.
- ・ A. リチャードソン / J. ボウデン編 (2005), 『キリスト教神学事典』 古屋安雄監修, 佐柳文男訳, 教文館.
- ・ 平野和歌子 (2021) 「起源からの流出／誕生、ペルソナと固有性——ボナヴェントゥラの「生むゆえに、御父である」に関して——」、『龍谷哲学論集』第36号、pp.29-59.
- ・ —— (2023) 「ボナヴェントゥラにおけるフィリオクエの論理」、『中世哲学研究』VERITAS 第42号、近日刊行.

謝辞 本研究は JSPS 科研費 21K12851 の助成を受けたものである。